

# 『初恋コンプレックス』

著：ナツ之えだまめ

ill：北沢きょう

北村はため息をつく。

いったいなにが悲しくて、土曜の昼下がり、風も心地よい初夏、銀座の街を男二人で歩かなくちゃならないんだ。

北村は、もっさりしたヘンリーネックのシャツにチノパン、さらに薄手のジャケットを着用している。隣の高塔はシャツにスラックス、そしてカーディガンに羽織っていた。カーディガン。初夏の麻のカーディガンなんて、ほんとの洒落者じゃないと持たないだろう。しかも、色は白。菓子のソースをこぼしたらどうする。

一軒目は新しい店でマカロンを食した。二軒目はフルーツがふんだんにのったタルトだった。どちらもおいしいのだが、ぴんとこないまま、三軒目になだれこむ。

その店はイトインが地下にあった。地上のテイクアウトフロアで待っていると、ホールスタッフがこちらです、と案内してくれる。赤い絨毯を踏んで螺旋階段を下っていくと、壁にはろうそく形の装飾があり、イトインのコーナーは薄暗く、まるで地下室に入っていくような印象があった。ここらにしては広めにとられたテーブルには白いクロスがかかっている。

「どうしたんですか」

「おまえ……、いや、高塔、さんと、こんなところでケーキの食べ歩きをしているなんて、変な気分だ、……です」

「俺もですよ。……あの。前から思っていたんですけど、北村さん、敬語はやめてもらえませんか。気持ち悪いです」

北村はかっとなった。

「気持ち悪いつて、おまえなあ」

こっちだって好きでさんづけしているわけじゃない。

「なんだよ、ひとがせっかく社会人として常識的につきあおうとしてるのに」

「いいですよ。もっと砕けた言葉遣いで。むりしないでください」

そのとき、ホールスタッフの青年がメニューと水を持ってきてくれたので、二人は黙る。彼が一礼して去ったあと、話を再開した。

「まあ、確かに。俺もおまえの前で敬語を使うの、なんだかどうにも居心地が悪かったからいいや。俺のほうが年上だしな」

「出ましたね。体育会系」

「実際にそうなんだからしょうがないだろ。バレーボール部の先輩と後輩だ」

「何年前のことですか」

北村は指を折って数え出す。

「えっと、十年。……そんなになるのか？ 違う。十一年だ」

メニューを見ていた高塔が言った。

「なんで服部さんに、俺たちのことを隠すんですか？」

言われて、手が数えたままのかたちで止まる。

「別に……」

「まあ、全部を打ち明ける必要はないですけどね。小さいときから高校まで、一緒にいたことぐらい、話してもいいんじゃないですか」

彼の言うとおりで。どうしてなんだろう。北村は答えを探す。いちばん、もっともらしい、自らを納得させることができる答えを。

いつもそうだ。あのときから。春の夜の公園で、彼に、あの言葉を突きつけたときから。

「それは、ほら。高塔はカスタネッラの側の人間だから。おまえと俺が元々の知り合いだって知ったら、おまえが俺のことをひいきにしたのかと思われるじゃん」

「まさか。いくら身内でも、実力のない人間と組むほど、仕事をおろそかにはしてません」

彼が肩をすくめる。さらりと髪が耳元で揺れた。

「おまえ、なんかつけてる？」

彼からは、澄んだ香りがしていた。夜の森から漂ってくるような匂いだった。

「休日なので、少しだけフレグランスを。きつかったですか？ 菓子を味わうのにじゃまにならない程度にしたつもりだったんですけどね」

「気にはならない。ただ、そういうの、つける歳になったんだなって思って。なまいきだ」

冗談めかして言うと、彼があきれたように返してくる。

「俺がいくつだと思っているんですか。もう二十七ですよ」

「うん。そうか。うん」

そのときに、ホールスタッフがやってくると、ふたりにオーダーを訊ねた。高塔は苺のミルフィーユを、北村はクレープシュゼットを頼む。

「それと、紅茶を」

銘柄を指定する。ホールスタッフが下がったあと、「そんなこと、だれも思いませんよ」と高塔は言った。

「なんのことだ？」

「さっき、北村さんが言ったことです。ひいきと思われるとか、ないでしょう。パリの一流店ピヴォワンの日本支店でその腕を認められ、さらには転職後のシフォン・グラッセでは社内賞を総舐めにし、今はチームを任されている男が、なにをおっしゃる。年齢こそ若いですが、実績としては申し分ないと思いますが」

「なんでそんなこと知ってる？」

「この仕事をするときに、社内報を取り寄せましたから。御社のほうからも何人が候補をあげてもらったんですが、その中にあなたも入っていました」

「最終的に決めたのはおまえか？」

「俺ですよ」

「どうして、わざわざ俺にした？」

悪魔はこいつか。やはりこいつが原因なのか。

「北村さんとだったら、うまく落としどころを作っていけると思ったんです。俺たち、とても息が合っていましたから」

きりきりきり。ねじの巻かれる音が聞こえそうな気がした。決して再びあけてはならない箱があけられようとしている。

やがて彼の前に苺のミルフィーユが置かれる。大ぶりの苺を惜しみなく使い、固めのカスタードと生クリーム、そしてバターの薫り高いパイ生地が交互に重なり合った菓子だ。

「先にいただきます」

そう断ってから、高塔がフォークを入れると、さくっと音がして生地からとろりとカスタードがあふれ出た。

「失礼いたします」

テーブルにワゴンが横づけられた。この店では、クレープシュゼットをワゴンサービスで提供してくれるのだ。照明はそのために薄暗いのかも知れない。目の前でエプロンを着けたスタッフがぴかぴかに磨き上げられた銅のフライパンをコンロに載せる。中に入っているのはクレープにバターに砂糖、そしてオレンジの果肉とジュース。温められたクレープシュゼットにホールスタッフがブランデーグラスをかざす。香りからして、二種類のオレンジリキュールを使用しているようだ。ぱっとグラスの中のリキュールに火がついた。その炎を、クレープシュゼットに注いでいく。ちりちりちり。砂糖が香ばしく焦げていく。やがて炎はクレープに吸い込まれる。

サーブされたそれを、ナイフとフォークで切り分け、口にする。リキュールのアルコール成分は飛び、香りだけが残っている。甘酸っぱいオレンジソースがなめらかなクレープにしみこみ、文句なしにうまい。黙々と食していると、「少し、もらってもいいですか」と高塔が口にした。いいとも悪いとも言っていないのに、向かいから手を伸ばしてきて、無遠慮に自分のフォークで切り分け、運ぶ。オレンジソースがテーブルクロスに滴った。

「おい」

彼はそれをなんのためらいもなく口に入れると、咀嚼した。

「おいしいですね」

しかたねえなと北村は大目に見ることにした。

「ああ。俺は、ここのこれが大好きなんだ。リキュールの甘い香りとクレープ、そしてオレンジソース。紅茶もいいが、これなら、きっとコーヒーにも合うだろうな」

そこまで言う前から、手を止めた。

「どうしました？」

「クレープシュゼット」

そして、たたまれていたクレープを一枚ずつ、開き始める。つつき、持ち上げ、ソースをなめる。忘れていた写真を、今になって撮り始める。

「クレープシュゼットだ」

「は？」

もちろん、チルドとワゴンサービスできるような店の菓子は違う。

「これをこのままは使えないけど、絹の舌ざわりのクレープと甘酸っぱいオレンジソースの取り合わせは、いけるよ。酸味の強いコーヒーにも合う」

高塔は、しばらくクレープシュゼットの皿を見つめていたが、うなずいてくれた。

「おもしろいアイデアですね」

やったー、と声に出して両手を上げたい気分だった。ずっと塞がっていた道に突破口が見つかった嬉しさ。

あとはこれを自分なりに磨き上げ、ユーザーのニーズに落とし込み、さらに工場の大量生産に対応させなくてはならない。今すぐ会社に帰って試作をしたいと思ったが、今日明日は休みだ。

「来週の試食のときに間に合いますか？」

「間に合わせる。ほかの菓子はおおよそ固まっているからな。これに集中してとりかかれると思う」

「わかりました。その方向でいきましょう」

高塔が手帳に書き込みをしている。

「どうですか。まだ時間はあります。もう一軒、行きましょうか」

「.....うーん.....」

じつは、甘いものをそこまでたくさん食べられない。試食なのだから、味がわかればそれでいいのだが、出されたものは全部食べなさいと親に教育されているし、味に瑕疵がないのに残してしまうのは作ってくれたパティシエに対して失礼だという思いがある。自分だって、ひとくちかじっただけで捨てられたらショックだろう。

「ちょっときつい、かな」

ふっと笑う。

「.....ここに服部がいたらよかったのにな」

驚異の甘党、服部妙子なら、いともたやすくこれらのケーキを平らげ、さらにはもう一軒行きましようと言ったに違いない。味見程度にケーキを切り分け、あとは食べてもらえばいい。

「気に入ってるんですね」

「あの、食べっぷりがいい」

もとは経理にいた彼女を自分の部下にと懇願したのは、服部の入社時の志望動機がとにかくシフォン・グラッセの作る菓子が好きだからというものだったからだ。女性ならではの菓子への視線を取り入れたいというのが、主な理由だった。それになにより、服部が自分の作った菓子をおいしく食べているところを見るのが、北村は好きだった。

まあ、なにを食べさせても「おいしい」で済ませてしまうくらいがあることは否めないのだが。

「可愛いですね、彼女」

「そうだな。いい子だ」

そう言われて、はっとした。

「おまえ、うちの社員に手を出すなよ」

彼はしばらく目を丸くしてこちらを見つめていたが、やがて失礼なことに笑い出した。テーブルが震えて、ミルフィーユのパイくずが、クロスの上に散らばる。

「なんだよ。そんなに笑うほどのことか？」

「ああ、すみません。そう来るとは思っていなくて。北村さんは相変わらずなんですね」

「だから、なにがだよ？」

彼は、人差し指を唇の前に立てた。

「教えてあげません」

まあ、いい。北村は、椅子の背に自分の身体をもたせかけた。

「あの、さ。もう一軒なら、つきあってほしいところがあるんだけど」

そう言うと、彼はどこかとも聞かないうちに「いいですよ」と返してきた。

しかし、北村の返事を聞くと、彼は顔を曇らせた。

もう一軒、と言ったところはカスタネッラの銀座店だった。

カスタネッラは全国展開しているが、数店舗を旗艦店として新作のコーヒーはまず、そこに優先的に出す。銀座店はそのうちのひとつだった。

表通りには、日本有数の化粧品会社のショールームや、海外ハイブランドの路面店がひしめいている。その一本入ったところにカスタネッラ銀座店はあった。

行ってみると、土曜日の午後、ちょうどお茶をする時間だけあって、だいぶ人が並んでいた。どうしたわけか、高塔はこの店に行くことに気が進まないようだった。足取りが重い。

「なんだ、なにか用事があるのか？ だったら、先に帰ってもいいぞ。今食べた洋菓子の味を舌が覚えているうちに、カスタネッラのコーヒーを飲んで組み合わせてみたいだけだから」

「いえ。用事があるわけじゃないんです。今日はあなたのためにずっとあけてます。そうじゃないんですけど。ただ」

「次の方、どうぞ。二名様ですね」

スタッフに誘導されて、店内に一步足を踏み入れたとたんに彼がどうしてここに自分を連れて来たくなかったのか、北村は悟った。

「なあ、高塔」

そう言った、自分の声は震えていた。

「なんでしょうか」

「この店の内装を考えたのは、だれなんだ」

「インテリアデザイン会社じゃないですか」

「その大本を考えたやつだよ」

「……いい勘ですね。正直に言います。俺です」

「だと思ったよ。だって、ここは」

オーク材のカウンターの向こうには、ネルドリップのための布や、フレンチプレスのシリンダー状のガラス器、エスプレッソマシン、コーヒーメーカー。壁一面のコーヒー豆。店内から焙煎機が稼働しているのがデモンストレーションを兼ねて見ることができ、コーヒーの煎りたての匂いが漂っている。テーブル席が十数卓あるフロアには、まるで子どものおもちゃのようにカラフルな積み木が組まれていた。

これは、うちだ。あの家だ。

高塔が中学にあがったころ、父親だけでなく、母親も働きに出るようになり、夕食までのあいだ腹が減った自分たちはおやつを作るようになった。菓子を作るのは主に自分だ。妹のふみかときたら、料理の才能がまるっきりなくて、もっぱら食べる専門だった。そして、コーヒーを淹れるのは高塔の役目だった。最初はとても飲めたものではなかった。だが、彼は――ほかのすべてにおいてそうであるのと同様に――ねばり強く、しつこかった。やがて焙煎までうまくこなすようになり、各々の好みや当日の体調を考慮した配合までマスターしていった。

休日には家族みんなで、北村の作った菓子を食べ、高塔の淹れたコーヒーを飲むのが習慣になっていた。

「おいしい」

妹のふみかは丸くてふくふくした頬と細くて長い手足を持っていた。

「喫茶店だね、ここ。カフェ高塔」

バレリーナ志望だというのに、ふみかは甘いものが大好きで、作れば作るだけよく食べた。それでよく太らないわね、と、控えめに食べている母親が言うと、けろりとして言った。

「十六歳になるまでは好きなだけ食べようと思って」

「なに、それ」

ふみかは真剣な顔をしていた。

「バレエの先生も友達も先輩も言ってるの。十六までは食べても太らないって。でも、それをすぎたら制限しないと贅肉になるって。肉々しいシルフィードなんて様にならないでしょう。だから、それまでは思う存分食べるの」

十六歳になるまでは。

その言葉を思い出すたびに胸の中心がぎりぎり痛む。

カウンターの上にあった筆箱の中の、青緑色のペン。なにげにとりあげ、買い物のメモをしようとしたら、彼女に大急ぎで止められた。

「だめ」

「なんだよ、いいだろ」

「おにいには、こっち」

差し出されたのは、普通の黒いペンだった。

「は？ なに？ 特別なペンなのか？」

そう訊ねると、彼女は赤くなってうつむいた。あとから、高塔がこっそりと教えてくれた。

「あれっておまじないでしょ」

「おまじない？」

「なんでも、相手の名前を青緑色のペンで百回書けば、恋がかなうって言われてるらしいよ」

「ええ、そうなの？」

いつもお菓子を食べるか、バレエの練習をするかしている妹が恋なんて、考えたこともなかった。

「詳しいなあ、おまえ」

それにしても百回。すごい根性だな。そんなことを思ったのを覚えている。

自分たちだけの喫茶店。カフェ高塔。それとそっくりな内装の店で飲むコーヒーは、心なしかあのときと似ている気がした。だから、ここに連れてきたくなかったのか。北村が昔を思い出すから。

テーブル席に着くと、コーヒーを注文した。出てきたカスターネッラブレンドを無言のまま飲んでみると、かたわらにホールスタッフが立った。

なんだろうと彼を見る。カスターネッラの制服である、白いシャツに黒いベストにパンツ姿の彼は、まだ若い。学生のように見えた。胸にある名札を見ると「矢田」とあった。

彼が高塔を呼んだ。

「リュウ」

その呼び方は、ずいぶんと懐かしい。北村が昔、彼を招くときにした呼び方だ。そして、単なるホールスタッフの客に対してする呼びかけではないのは明白だった。

「ああ、久しぶり」

高塔は北村の縦皺が乗り移ったような、苦り切った顔をしている。矢田が文句を言ってきた。

「久しぶりって、なんだよ。そっちが連絡してくれてないだけじゃないか。俺からの電話にも出なくてさ」

高塔は困った顔をしている。彼が、ここに来たがらなかったわけを、この内装によると思っていた北村だったが、もしかしたら真の理由はこの青年にあるのかもしれない。こちらを見る目が厳しい。

「なに、この人？」

「失礼なことを言うんじゃない。会社の人だよ」

「ふうん。忙しいんじゃないんだ。会社の人と、休日に、わざわざ。俺の誘いにはちっとも乗ってくれないくせにさ」

「いい加減にしないか」

強く言われて、青年は頬を膨らませた。

「わかったよ。邪魔しないよ。だから、また来てよ」

「気が向いたらな」

彼が去ってしまうと、高塔は、「見苦しいところを見せてしまって」と謝罪した。

「いや」

しかし矢田のほうをうかがうと、彼もこちらを見つめていた。目が合うとぷいとそらす。ふつうの仲でないことだけは確かだ。

「どういう関係なのか、聞いてもいいか？」

そう訊ねると、高塔はしばし沈黙してから微笑んだ。

「ノーコメントです」

「……昔の恋人、とか言わないよな」

高塔は肩をすくめた。

「俺に男の恋人がいたらおかしいですか？ まさかあなたにそんなことを言われるとはね」

北村の顔が赤くなった。

「すまん。詮索しすぎた」

「そういえば」

高塔が携帯端末を取り出した。

「北村さんのメッセージアプリのIDをいただいてもいいですか。まだでしたよね」

「ああ、そうだな」

北村もごそごそと端末を出して、互いのIDを交換する。早速、着信音がした。画面では、彼を示すデミタスカップのアイコンが点滅している。

『これで迅速に連絡が取れますね』

返事をする。

『そうだな。今後とも、どうぞよろしくお願ひします』

そう書いて、送る。北村のアイコンは、今までのなかでは傑作と自負している桃と杏のババロアだ。しばらく考えていたが、さらに北村は付け足す。

『よけいなことを服部に言うなよ』

目の前の彼が、こちらをちらっと見た。それから、文字が綴られる。メッセージを受信した。

『それは、今日、あなたと俺が出かけたことに関してですか。それとも』

再び、着信音がした。

『俺たちが愛し合っていたことですか』

彼のほうを見た。視線が合った。高塔の唇は引き結ばれ、真意を汲むことができない。そう。自分たちは、つきあっていた。一生をともにすることを疑っていなかった。

「.....昔のことだ」

掠れた声で彼に告げた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>